

2026年2月12日 第1回フュージョンエネルギーワーキンググループ

# フュージョンエネルギーの成長戦略 —不確実性を前提とした産業化と制度的 予見性—

近藤寛子

合同会社 マトリクスK

# 日本型政策が「三つの過剰」に変換される構造

日本では、不確実性を段階的に引き受けながら前進する設計が弱く、そのことが政策を「三つの過剰」という形で表出させてきた。

この構造は、不確実性の高い先端分野ほど、より顕在化しやすい。

## 不確実性への向き合い方の構造

- 不確実性は「前倒しで解消すべきもの」と捉えられがち
- 責任は「意思決定」より「手続遵守」に置かれやすい
- 過去の成功体験（国研・大規模開発）が無意識に転用される

## 不確実性を前提に進む設計ができない

- 不確実性を段階的に引き受ける設計が弱い
- 主体間での役割分担が曖昧

## 結果として生じる3つの過剰

- 過剰計画
- 過剰分析
- 過剰品質

# 不確実性の高い分野では、問うべき問いが変わる

## 従来型の問い（暗黙の前提）

- 技術が見えれば、制度を設計できる
- 責任主体を明確にすれば、前に進める失敗を避けることが合理的である

## 先端・不確実分野で必要な問い

- 技術が見えない段階で、誰が何を引き受けるのか
- 不確実性を段階的に移転・分担する設計は可能か失敗や試行錯誤を、どこまで制度に織り込むか

フュージョンのような先端分野の成長戦略では、「正解を前提にした設計」そのものが問い直される。

# 「将来を固定する」 予見性から、「更新 できる」 予見性へ

## 従来型の予見性

### 「前もって決めておくこと」

- 技術が確定してから制度を作る
- ルールを固定することで安心を確保
- 責任の所在を事前に明確化



- 不確実性を抱えきれず
- 過剰計画・過剰分析・過剰品質へ

## フュージョンに必要な予見性

### 「段階的に見通しを更新できること」

- 不確実性を前提に進める
- 規制・支援・投資判断をフェーズで切り替える
- 主体間で“引き受ける不確実性”を移動させる

フュージョンに必要なのは、「将来を固定する予見性」ではなく、  
不確実性を引き受けながら前進できる予見性である。